

湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ

大学名 湘南医療大学
所 属 理学療法学専攻
名 前 山田拓実
作成日 2025 年 5 月 30 日

1. 教育の責任

学部

理学療法学研究法	必修	3年	科目責任者	科目担当(分担)
バリアフリー	選択	3年	科目責任者	科目担当(分担)
クリニカルリーズニング論	必修	3年	科目担当(分担)	
リハビリテーション医学	必修	1年	科目担当(分担)	
見学実習(理学療法)	必修	1年	科目担当(分担)	
評価学実習	必修	3年	科目担当(分担)	
地域リハビリテーション実習(理学療法)	必修	3年	科目担当(分担)	
総合臨床実習(理学療法)Ⅰ	必修	4年	科目担当(分担)	
総合臨床実習(理学療法)Ⅱ	必修	4年	科目担当(分担)	

大学院

前期課程

運動機能回復学特論 科目担当(分担)
運動機能回復学特論演習 科目担当(分担)
呼吸循環機能学特論演習(分担)
心身機能回復特別研究

後期課程

地域生活支援学特論(分担)
地域生活支援学演習(分担)
身体機能支援医療学特論(分担)
身体機能支援医療学演習(分担)
リハビリテーション学特別研究

理学療法研究法では、理学療法における研究の必要性について論じ、研究の形態や手順について研究例を提示しながら、研究テーマの設定、文献検索方法、研究の目的と方法、考察の実際について教授している。

バリアフリーでは高齢者や障害者の生活環境に存在する物理的環境バリアについて例示し、このような制約・障害を改善するために有効な福祉機器・住環境整備、地域の環境整備、法制度や行政・企業との連携のあり方について教授している。

臨床実習関連 5 教科に関しては、事後演習・実習報告会において理学療法学専攻教員として分担された役割を担っている。

大学院ではオミニバスとして前期課程 3 科目、後期課程 4 科目の講義を担当している。特別研究は指導教員として大学院院生の研究指導を行っている。

2. 私の理念・目的

私が教育に携わる上での理念は、「医療の未来を担う人材を育むためには、専門的な知識だけでなく、人間性とチームワークの重要性を強調する教育が必要だ」という信念に基づいている。

私は症例ベースの学習 (CBL) やシミュレーション教育を積極的に取り入れ、理論と実践が密接にリンクするような環境を作りたいと願っている。また、多職種間のコラボレーションを強調し、医療専門職が協力して患者に最善のケアを提供する重要性を教えている。また臨床データの中で個々の数字が持つ意義の重要性を教えている。将来的に学生が臨床現場で遭遇する多くの課題、例えば評価、治療方針の選定、リスク評価などにおいて役立つスキルを養う基盤になると考えている。医学的データ内の個々の数字に対する深い理解は多面的なスキルを育む素地となる。具体的なケーススタディや症例を用いて、これらの要点を学生に教えることで、より実践的な知識とスキルの習得が促されると考えている。

私が重視しているのは「学生主体の教育」である。医療は常に進化しており、医療・介護制度は日々変化しており、今学んでいる知識が将来必ずしも適用できるとは限らないため、自ら問題を発見し、解決する力を身につけることが重要だと考えている。

私から学生への期待は、単に教科書や論文から知識を吸収するだけでなく、それをどのように実践に活かすかを常に考える姿勢を持って欲しいことである。また、同僚や患者とのコミュニケーションにも真剣に取り組むこと。医療や介護はチームで成り立っていることから、専門的スキルだけでなく人間関係のスキルも高めてほしいと願っている。

私の目的は、単に優れた医療専門家を養成するだけでなく、患者や利用者、その家族から信頼される、そして同僚と協力してより良い医療を提供できるような人材を育て上げることである。その過程で、学生自身も自らの可能性を最大限に引き出し、成長して欲しいと強く願っている。

理念をもつに至った背景

経験と現場の感触

臨床経験や教育現場での経験から、専門的な知識だけではなく「人間性」や「チームワーク」が非常に重要であることを実感してきた。特に多職種の医療・介護チームでのコミュニケーションや患者ケアの現場で、これらの要素がいかに大切かを感じる瞬間が多々あった。

学術と現実のギャップ

教育や研究の過程で、学術的な知識と実際の臨床現場とのギャップに気づき、それを埋めるためにはどうすればいいかを考えた結果、現実的なスキルの重要性に焦点を当てるようになった可能性がある。

学生や大学院生からのフィードバック

これまで教育に携わる中で、学生や臨床に従事している大学院生から得られたフィードバックが自身の教育方針に影響を与えた可能性も考えられる。特に、「臨床に役立つスキル」や「人間関係で困っている」など、実際の現場で感じるニーズに対応するために理念が形成され

たかもしれない。

社会と医療の変化

医療界や介護保険制度が急速に進化し、その複雑性が増す中で、医療専門家が持つべき資質やスキルに対する考え方も変わりつつある。この社会的な変化に対応するために、柔軟かつ多面的な教育方針を考えるようになったのかもしれない。

3. 教育の方法・戦略

呼吸リハビリテーション領域における症例ベースの学習 (Case-Based Learning、CBL) 理学療法学専攻の学生が患者中心のケアを提供するスキルを高めるための効果的な手段となる。

カリキュラムの目的

呼吸器疾患・呼吸リハビリテーションに対する総合的な理解を深める

呼吸理学療法手法とその適用に関する知識を身につける

インタープロフェッショナルな協働スキルを磨く

症例は臨床でしばしば遭遇するものを選ぶことで、現実に応じた学習が可能となる

慢性閉塞性肺疾患 (COPD) の患者

肺炎後の高齢者

呼吸不全による入院患者

呼吸筋疲労が認められる症例

CBL のステップ

1. 症例の紹介

学生に具体的な症例の胸部の画像データ、血液ガスデータ、呼吸機能検査、運動負荷試験等の医学的データを配布。患者の年齢、性別、基礎疾患、ライフスタイルなどの背景情報を含める。

2. 情報の収集と分析

学習者は症例に関連する医学文献やガイドラインを参照し、疾患のメカニズム、評価手法、治療プログラムについて調査。

3. 仮説の立案

チームで討論し、最適なリハビリテーションプランを考案。

4. プレゼンテーションと討論

各チームが自分たちの仮説とプランをプレゼンテーション形式で発表。その後、教員や他のチームからの質問やフィードバックを受ける。

5. フィードバックと反省

教員からの詳細なフィードバックを基に、どのように改善できるかを自己評価とともに考察。

評価指標

患者評価、ゴール設定、治療プログラムの妥当性

チーム内のコミュニケーション
文献の適切な利用
インタープロフェッショナルな協働

4. 学習成果

症例ベースの学習 (Case-Based Learning、CBL) を受講した学生からは、多くの肯定的な評価やコメントが寄せられている。

授業評価

「実際の症例を用いたことで、理論だけでなく臨床的な視点からも学びました。」

「チームでの討論が活発で、多角的な視点を得ることができました。」

「教員のフィードバックは、自分たちの考えや解決策を評価・調整する貴重な機会となった。」

「リアルな症例を扱うことで、興味・関心が高まりました。」

「学際的な協働の重要性を実感できました。」

これらのコメントや評価は、CBL が如何に多面的な学習体験を提供できるかを示している。学生が実際の臨床場面で遭遇するであろう症例に対して、より効果的に対処できるスキルと自信を身につける過程となる。

5. 改善のための努力

・症例の質と多様性

症例が十分に多様でないと、学生は特定の状況や疾患に偏った知識しか獲得できない恐れがある。

・評価方法

CBL の評価方法はしばしば主観的になりがちであり客観的かつ公平な評価基準の開発と適用が必要となる。

・時間とリソース

CBL は十分な時間と教員リソースを必要とする。特に多職種間での CBL を行う場合、コーディネートに時間がかかること。

・フィードバックの質

学生に対するフィードバックが不十分または不適切な場合、学習効果は低下する。教員のトレーニングが必要である。

・学生参加とエンゲージメント

学生が積極的に参加しないと、CBL の効果は限定的となる。参加を促す方法や学生のエンゲージメントを高める手法が求められる。

・カリキュラムとの統合

CBL が単発の活動となっている場合、その効果は一時的である可能性が高い。CBL を全体のカリキュラムに統合する必要がある。

- ・学内情報教育支援システムの充実

オンラインプラットフォームや仮想環境で CBL を効果的に行えるよう、学内情報システムの整備が必須である。

6. 今後の目標

CBL (症例ベースの学習)とシミュレーション教育を融合させる。3 年

融合により、CBL とシミュレーション教育それぞれの長所が最大限に活かされ、より効果的な医療教育が実現可能となる。多くのメリットが生じる可能性があり以下にその主なポイントを挙げる。

- ・理論と実践の一体化

CBL が提供する具体的な症例に基づいてシミュレーションを行うことで、学生は理論的な知識を実践的なスキルに結びつけやすくなる。

- ・実践的なスキルの向上

CBL で学んだ症例に基づいてシミュレーションを行い、その後ディスカッションを行うことで、より深いレベルでの理解と反省が促される。

- ・インタープロフェッショナルな教育

CBL とシミュレーションを多職種 of 学生のチームで行うことにより、議論した治療計画や検査を、実際にチーム内で共有し、実行する過程でのコミュニケーションや協調性も鍛えられる。互いの専門性と協働の重要性を理解しやすくなる。

- ・自己評価とフィードバック

シミュレーションによって、学生自身のスキルや知識、判断力を直接テストすることができる。

- ・柔軟な教育環境

CBL とシミュレーションの融合は、オンラインや対面、さまざまな設定や環境で実施可能である。これにより、多様な教育ニーズに対応できるようになる。